

common terms for instance, but at least it is about discussion and engagement.

The globalisation of today - neoliberal capitalist, financially dominated, and corporate - has had momentous implications for women. In order to open up our discussion let me just point to a few of them. I would argue that what they exemplify is some ways in which neoliberal capitalism has articulated to patriarchy, to their mutual benefit. Most evidently, capital has used its global mobility to search out and exploit regional differences in gender relations (at the same time as undermining trades unions in the countries of the global north and west). The ambiguous results for women - trading escape from oppressive patriarchal systems for more immediately economic exploitation - have been much analysed. Much of this has also been accompanied by new forms of sexual exploitation, often coercive and violent. At the same time, where previously there had been some welfare provision through the state, the dismantling of the public sector has loaded increasing responsibilities, and unpaid labour, on to women. The proliferation of wars - and wars of a different kind, in which rape has become a 'normal' weapon - has been devastating for women around the world. And the rise of religious fundamentalisms, already noted, has often brought further restrictions on the lives of women. This grim intersection of neoliberalism and patriarchy is not a logical necessity, but all systems of power provide an environment for each other and the current conjunctural meeting-up of these two systems does seem to have been worked to their mutual benefit.

【解説】マッシー教授お茶大セミナー「グローバルゼーション、ジェンダー、空間、場所」に寄せて

熊谷 圭知

I マッシー教授の紹介

ドリーン・マッシー教授は、1944年英国に生まれた。ペンシルヴァニア大学で修士号を取り¹⁾、1968年～1980年まで英国の環境研究所に務める。同研究所がサッチャー政権下で廃止された後、オープンユニバーシティの地理学部に移り、2009年まで活躍。退職後は名誉教授となる。

マッシー氏の業績は幅広い。中期まではイギリスの産業構造の変化に伴う地域の衰退と地域問題の理論的・実証的解明が中心的課題であった。その代表作が、1984年

Which raises a question for feminism: are things in fact getting worse for women? I grew up in European social democracy. In spite of all its inadequacies, it did enable many gains by women, and it generated an overall sense of progress, of a larger history in which things would change for the better. There was much wrong with all this, but its loss is catastrophic. Even within the purely economic the new articulations of capitalism and patriarchy do not give me hope. The new capitalisms, especially in Asia, seem to be based more on the subordination of women, and on new forms of masculinity and male dominance. Is this so? And 'at home', in the UK, the 'new' sectors that are hailed as our economic future are 'high technology' (dominated by forms of scientific masculinity) and by a testosterone-fuelled finance sector. What does all this foretell? How does it look from Japan?

References

- Massey, D. 1991. Flexible sexism. *Environment and Planning D: Society and Space* 9: 31-57. (reprinted in Massey 1994)
- Massey, D. 1994. *Space, Place and Gender*. Cambridge: Polity Press.
- Massey, D. 2005. *For Space*. London: Sage. (translated into Japanese, and published in 2014)
- Massey, D. 2015. Tokyo Lecture: Geography and Politics. *Geographical Review of Japan* 88B, in press.

Doreen Massey (ドリーン・マッシー)

Emeritus professor of the Open University (英国オープンユニバーシティ・名誉教授)

に刊行された *Spatial Divisions of Labour* (邦訳『空間的分業』富樫幸一・松橋公治訳、古今書院、2000年刊) である。

しかしその頃からすでにフェミニスト地理学者としてのマッシー氏の問いが顕在化している。『空間的分業』と同じ1984年に、マッシー氏はフェミニスト地理学者のリンダ・マクドゥエル氏とともに「女性の場所？」と題された論文を書いている (McDowell and Massey 1984, Massey 1994に再掲)。その中で彼女は、男性の肉体労働に支えられる石炭業と女性の雇用を作り出してきた綿織物産業を対照しつつ、地域の基幹産業がジェンダー化されていること、そしてそれゆえに地域衰退への対策として取られた英国の地域開発政策に石炭産業地域は組み込

まれたが、綿産業地域は対象から外れたことを指摘し、地域経済の問題にジェンダーの視点が不可欠なことを主張している。

こうした問いは、目をつぶって地球儀を回して指差した所が、どんな場所でどんな暮らしがあるのか想像することが好きだったという地理少女としてのマッシー氏に、幼少のころから存在していた。1994年刊の『空間、場所、ジェンダー』の中では、子どもの頃、生まれ故郷のマーザー川の広大な泥土の土地が、ラグビーやサッカーで遊ぶ男の子の空間だったこと、10代後半に男友達二人と美術館に行き、そこに展示されている大部分が（男性によって描かれた）女性の裸体の絵を（男子が）まなざしていることに違和感を覚えたこと、などが瑞々しく語られている (Massey 1994: 185-186)。

マッシー氏の、というより地理学全体の「場所論」のスタンダードとして有名な「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」(1993=2002) は、デヴィッド・ハーヴェイの『ポストモダンシティの条件』(1992=1999) への対抗的な応答であり、オルタナティブな場所の可能性を示したものといえる (熊谷 2013)。その中には、グローバル化のいわば強者によって描かれる空間論への違和感と、グローバル化で取り残される弱者への地理的想像力が滲んでいる。マッシー氏の場所／空間論の集大成が2005年に刊行された *For Space* (邦訳『空間のために』森正人・伊澤高志訳、月曜社、2014年刊) である。彼女は、この中で現在の新自由主義的なグローバリゼーションの批判にはじまり、時間／空間の二元論を根源的に批判し、空間を相互関係の産物として捉えなおそうとしている。私たちは、場所＝空間に「ともに投げ込まれている」(thrown-togetherness)。その中で、必然的に生じる多様性と他者との交渉の過程こそ、空間をダイナミックにする要件なのである。それはもちろん予定調和的なものではない。マッシー氏が強調するのは、他者に時間、声、耳を傾けることであり、空間／場所における「応答責任」(responsibility) である。これは地理学の枠を越え、グローバル化時代に生きる私たちに共通の課題といえるだろう。

II 来日の経緯と日本での活動

今回の来日は、マッシー氏の『空間のために』が出版されるのを機にした、翻訳者である三重大大学の森正人氏の強い働きかけを氏が快諾したことによって実現した。マッシー氏の来日は、1980年の東京の国際地理学会以来、34年ぶりのことである。招聘の旅費は、熊谷が代表者を務める科学研究費 (基盤 (A) 「ローカル・センシティブ

なジェンダー地理学とグローバル・ネットワークの構築」)、および大阪市立大学の水内俊雄教授の科学研究費 (基盤 (A) 「東アジアの広義のホームレス支援に基づく包摂型都市生成と支援の地理学の構築」) から支出した。

滞在中のスケジュールは、以下のとおりだった。

- 3月19日 (水) 成田着、関空経由で大阪泊
- 3月20日 (木) 打ち合わせ (西成プラザ) / 大阪巡検
- 3月21日 (金・祝日) 人文地理学会例会 (大阪市大・都市研究プラザ) 「グローバル時代における場所の再定義」
- 3月22日 (土) 神戸巡検
- 3月23日 (日) 京都巡検
- 3月24日 (月) 若手研究員との交流フォーラム (大阪市大・都市研究プラザ)
- 3月25日 (火) 東京に移動
- 3月26日 (水) お茶の水女子大学でのワークショップ
- 3月27日 (木) 日本地理学会特別講演 (国士舘大学)
- 3月28日 (金) 東京巡検 (浅草～大久保～都庁～新宿)
- 3月29日 (土) 東京巡検 (月島～豊洲・枝川～新橋～神田)
- 3月30日 (日) 成田発、帰国。

10日間の滞在期間の間に、4回の講演・ワークショップをこなす、精力的な日程だった。ジェットラグと連日の疲れが重なり、26日に日本地理学会の講演に現われた時はさすがに少し憔悴しておられたが、講演会の会場に入ると、凛とした表情と歯切れの良い口調で講演をこなされた。その講演 (Geography and Politics) の要約 (後日マッシー教授自身が書き起こしたもの) は、日本地理学会の学術誌 *Geographical Review of Japan Ser. B* にすでに掲載されている。

その前日のお茶の水女子大学のセミナーでは、熊谷の趣旨説明を兼ねた報告、二人の討論者 (お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科研究員・太田麻希子氏、東京学芸大学准教授・松川誠一氏) によるマッシー氏の仕事に対するコメントを軸にした報告の後、1時間ほどマッシー氏の講演が行われ、その後の1時間半近い討論にも丁寧に応えられた。さらにその場で引き続き行われた懇親会にも2時間以上最後まで付き合われ、テーブルを廻りながら、院生や若手研究者も分け隔てなく、笑顔で丁寧に応対する姿が印象的だった。そこには、建前だけではなく他者との対話を喜んでいる人間としてのマッシー氏の姿があった。それは、講演の内容と同様に、私たちが力をづけるものだった。

III 本講演の内容

お茶の水女子大学での講演については、ジェンダーというテーマを加えたものにするをあらかじめ依頼し、

私が提案した「グローバリゼーション，ジェンダー，空間，場所」という仮題を，マッシー氏が快諾してくれた。

先に掲載した原稿は，後日講演内容を要約してマッシー氏が書き下ろしてくれたものである。平易な英語で書き表されており，内容について細かく紹介する必要はないだろう。以下では，要点のみを記しておく。

まず冒頭では，マッシー氏自身が第二派フェミニズムの影響を受けたフェミニスト地理学者であることが言明されている²⁾。フェミニスト地理学者であるということは，ジェンダーをめぐる問題に限らず，すべての研究にフェミニズムの視点を持ち込むことであり³⁾，地理学の知の生産がいかに男性支配的な様式であるかを明らかにすることである。それは学問の営為と社会の関与の間の回路を開放しておくことでもある。

次に時間／空間の二元論（前者を動的，生成的，男性的なもの，後者を静的，構造的，女性的なものとする）とともに，空間／場所の二元論（ここでは前者が可変的で男性的なもの，後者は変わらない，女性的なものとし，ロマン化される）を批判する。

グローバル化についていえば，現在の新自由主義的なグローバル化が，「先進国」と遅れた国を，時間的な差異に置き換えることが批判される。しかしそれはフェミニズムにも難しい問いを突き付ける。宗教原理主義による女性の抑圧を単に「遅れた」ものであり，近代化によって解決されるものとはとらえられないことになるからである。

マッシー氏は，自らがあくまで英国生まれの西欧の女性の立場から発言していることの制約を自覚している。そして問う。アジアでは，そして日本ではグローバル化にともない，どのような新しいかたちの女性の従属と，支配的な男性性が出現しているのだろうか。

その答えは，「有名人」(big names) のマッシー氏に尋ねるべきものではなく，私たち自身の仕事であることはいうまでもない。

注

- 1) マッシー氏は博士号は持っていない。私たちがメールでやり取りするとき，うっかりDr.と書いてやんわり指摘されたことがある。「経歴詐称はしたくないから」とのことである。
- 2) 『空間のために』の記者解説の中で，森正人氏が「マッシー氏は反フェミニズムをとおしても空間概念を練り上げた」(マッシー 2014: 393)と書いておられるのは適切ではない。マッシー氏が二元論的なジェンダー観を批判していることは間違いないが，それはフェミニズム自体が批判の対象としてきたものにほかならない。
- 3) マッシー氏は，自らはフェミニスト地理学者であるが，ジェ



マッシー教授セミナー懇親会終了後の記念写真

(2014年3月26日 お茶の水女子大学)

ンダーは専門にしていないと語る。同様のカテゴリー化は，私が話した海外のフェミニスト地理学者も示していた。日本では，逆にジェンダー地理学の方がフェミニスト地理学よりも広い概念のように思われている（自分はジェンダーの地理学は研究しているがフェミニスト地理学者ではないという語りしがしばしばなされる）ことと対照的で，興味深い。

文献

- 熊谷圭知 2013. 場所論再考—グローバル化時代の他者化を超えた地誌のための覚書. お茶の水地理 52: 1-10.
- Harvey, D. 1992. *The Conditions of Post modernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*. Oxford: Blackwell.
- D. 著, 吉原直樹監訳 1999. 『ポストモダニティの条件』青木書店.
- Massey, D. 1984. *Spatial Divisions of Labour*. マッシー, D. 著, 富樫幸一・松橋公治訳 2000. 『空間的分業—イギリス経済社会のリスラクチャリング』古今書院.
- Massey, D. 1993. Power-geography and progressive sense of place. In *Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change*, eds. J. Bird et al., 59-69. London: Routledge.
- マッシー, D. 著, 加藤政洋訳 2002. 権力の幾何学と進歩的な場所感覚. 思想 933: 32-44.
- Massey D. 1994. *Space Place and Gender*. Cambridge: Polity Press.
- Massey, D. 2005. *For Space*. London: Sage publication Ltd.
- マッシー, D. 著, 森 正人・伊澤高志訳 2014. 『空間のために』月曜社.
- McDowell, L. and Massey, D. 1984. A women's place. In *Geography Matters!: A Reader*, eds. D. Massey and J. Allen, 128-147. Cambridge: Cambridge University Press.